

知念良雄著『模合考（ユーレーとは）』

片 多 順 解説

解 説

模合（モアイ）は沖縄に独特の社会組織であり、伝統文化である。これはかつて本土でも盛んであった頼母子講や無尽講に形態は似ているが、内容は全く異なるものである。頼母子講などは本土ではほとんど消滅したが、模合は現在でも沖縄社会に広く浸透しており、一人で五つや六つの模合に参加している人も多い。

模合の歴史は古く、沖縄の歴史書である「球陽」にも記されており、18世紀以前から存在していた。かつては「ムエー」や「ユーレー」などと呼ばれたが、戦後は模合として統一されている。

模合の本質は民間による金銭的相互扶助システムであった。かつて貧しい庶民たちが家を建てたり、墓を造ったり、子供の学資や結婚資金など一時的に必要な大きなお金を工面するのに役立つ金融システムである。例えば、10人の仲間で模合のグループをつくり、毎月一人が10万円ずつ持ち寄る。すると10人で100万円の大金が集まることになる。それを毎月誰かが順に引き落として、まとまったお金として利用するのである。銀行から金を借りようにも担保も信用もない庶民にとって唯一の金融手段ともいえるものであった。

近年はこのような金融システムとしての模合はほとんど意味がなくなったが、沖縄では模合の組織そのものは廃れるどころか、ますます盛んになる傾向が見られる。現在の模合はそのほとんどが、いわゆる「親睦模合」であり、月に一回気の置けない友人たちが集まって旧交を温め、様々な情報を交換し合う場となっている。20代の若者も高齢者たちも、そして主婦やOLたちも様々な模合を組織してヨコのつながりを強めている。

現在の模合は掛け金も一人1000円から一万円程度であり、貯蓄や資金集めの目的は少なく、集まって飲食を共にして語り合うのが目的であるといえる。特にリタイアして現役を離れた高齢者たちにとっての模合は、ネットワークを広げ、情報を交換し、ストレスを解消する絶好の場となっている。つまり、沖縄の高齢者たちの生きがいや健康と長寿に大きな役割を果たしているのである。

このように沖縄全土で広範に多数の人々が関わって現在も活発に実施されている模合だが、その不思議の一つは学術的な研究や文献がほとんどないことである。そうした中で、この資料はきわめて貴重な研究であるといえる。以下に資料として提示する「模合考（ユーレーとは）」の著者、知念良雄氏は那覇市に住む一介の市井の研究者であるが、小さいときから母親たちの模合に付き合っ

てその書記役をしてきたため、50年以上にわたって模合に関わっており、自身の記憶を辿りながら

こつこつと書き上げたのがこの資料である。その意味でこれはまことに貴重な、模合の歴史と現状を知る文献であるといえる。

知念良雄氏のこの研究は平成7年(1995年)に書かれたものである。ここに収録するに当たっては、原著の趣を損なわないように、一部の仮名遣いや句読点などの修正を除いてはほとんど手を加えていない。読み進む内に「ユーレー」「ムエー」の性格や、かつて文字が読めないアンマーたちが、どのようにして模合を入札していたかなど、実に興味深い記述に溢れていることに気づかされるのである。沖縄文化に関心をもち、模合を知る人たちに是非一読して貰いたい貴重な研究書である。

まえがき

私たちウチナーンチュの社会で「模合」を知らない人は居ないと思う。

「ムエー グワー」「ユーレー グワー」の愛称で幼友達、同業仲間、老人クラブで、また、婦人のおしゃべり会としても気軽に結成し、親睦、相互扶助など社会生活に役立っているからである。

その上、企業の間でも営業資金の獲得手段として行われているから、民間相互金融制度とも言える活用ぶりで、県経済への貢献度も高いと思われる。

事実、本土復帰や海洋博後の経済混乱で、破産寸前の企業が立ち直ることが出来たのもこの「模合」のお陰であった、と言っても言い過ぎではあるまい。

「あの様な経済ショックで企業倒産が異状に少ないのは奇跡としか言いようが無い」との本土の経済学者の談話もあるからである。

この様に私たちの生活の一部として育ち、親しんでいる「模合」であるが、その語源や成立ちを改めて聞かれると、すぐには答えられないものである。

この素晴らしい共栄活動を末長く続けるために、とその調査に挑んだ。

以下は乏しい知識を手探りの資料で補って、私なりの考えを進めた記録である。

目 次

まえがき	3	ユーレーの変遷（1）	25
模合とは	4	ユーレーの変遷（2）	28
ムエーとユーレー	5	むすび	30
模合と言う語の成立ち	6		
ムエーの移り変わり	8		
ムエーとユーレーの混同	9		
ユーレーとは、その本質	10		
戦前の模合（1）概要	11		
戦前の模合（2）事例	16		
戦後のユーレー	20		
悪徳模合	22		

参考文献

- 郷土史辞典（大塚史学会 編）
 球 陽（桑江克英 訳注 三一書房）
 沖縄大百科事典（沖縄タイムス社 刊）
 沖縄語辞典（国立国語研究会 編）
 沖縄の模合（与那堅亀 著）

模合とは

語源

先ず、自分なりの記憶を辿って見た。然し、戦前の一般庶民の間で「模合」と言う言葉を聞いた覚えは無い。

念の為に80歳以上の方々に聞いて回ったが、その答えは異口同音に「ムエーとも、ユーレーとも言ったが、モアイとは言わなかった、それは多分ヤマトウ グチだろう」とのことであった。

ところが、国語辞典や広辞林にも「模合」と言う語は見つからなかった。次に「広辞林」のなかから語音の似ている言葉を探した。それによると、

【もや・い（催合）】「共同してすること」とあり、漠然としているので、関連語の【もや・う（催合う）】〔最合う〕を見たら、「人々が寄り合って、共同に事をする」「共同して金を出し合う」とあるので、「ムエー」や「ユーレー」にも通ずるから、現在の「模合」と同質であるということが分かった。

そこで、その基語である「催合（もやい）」の語音が沖縄語の「モアイ」と似ているので、「模合」は「催合」の当て字であろう、と推定した。

次に、沖縄大百科事典によると「模合」は「頼母子（たのもし）」や「無尽講（むじんこう）」の一種で相互扶助的な金融の仕組み「寄り合い（ユーレー）」ともいう。とあるので「催合（もやい）」が語源であることに確信を得た。

歴史

同事典によると「球陽」に尚敬王21年（1733年）『模合の法を定め、困窮士族を助けた』とあるのが「模合」と言う語が史書に初めて出た例であるが、この法は薩摩藩の大御支配に倣ったと思われる、とのことである。

もっとも、同辞典に「沖縄でも共同社会の互助組織は18世紀以前からあり、ユイマールなど労働も対象とした」とあるから、歴史はもっと古い事になる。

以上の事からすると「模合」は日本古語の「催合」で沖縄方言の「ムエー」であり、「ユーレー」の事でもある、となる。

「ユーレー」と「ムエー」は元来異質の庶民金融であるが、それが何故「模合」に含まれるのか、「ユーレー」の語源は無いだろうか、と言う疑問が生じた。

そこで、改めて「ムエー」と「ユーレー」との違いをはっきりさせる必要を感じた。

ムエーとユーレー

「ムエー」と「ユーレー」の違いについての文献や史書は見つけることが出来なかった。それで手元にある辞典類から調査に掛かることにした。

（1）沖縄語辞典

【模合】【ムエー】【ユーレー】のどれにも一様に「頼母子講」「無尽講」のこと。とあり、しかも【ムエー】の項にはユーレーとも言う。【ユーレー】の項にはムエーとも言う。とあって結局この三語は全く同じとされている。

しかし、「ユーレー」の項に「寄り合い（集会）の意だが、単なる集会にはスリー（揃いの意）と言う。」と補足されている。

ここでこの補足語が気に入り、「広辞林」で調べて見た。それによると、

（2）広辞林

【寄り合い】単に集まることで「寄り集まり」「寄り合い所帯」に引用される。【寄り集まり】規律の無い集まり「烏合の衆」とある。

つまり、厳格な決まりで運営される「ユーレー」には当てはまらないのである。

一方【揃う】は、並ぶ、集まる、で歩調（気持）が揃う、全員が揃う、などに用いられるとあり、「ユーレー」の精神を表している。

そこで、秩序を重んじる「ユーレー」の集まりに適切な「スリー（揃い）」と言う語があるのに、何故わざわざ、この無秩序な集会を意味するヤマトウグチの「寄り合い」を用いたか、疑問が生じた。

そう気が付いた時に、且つて母が言った「カキメーン、ウクイメーン、スリラワル、ユーレーヤル」と言う言葉を思い出した。

「掛け前（未給付口）も送り前（給付済口）も、揃ってこそユーレーだ」との極く当たり前の事であるから今まで気が付かなかったが、無学文盲の母であったから昔からの言い伝えで深い意味があるのでは、と感じて改めて吟味する事にした。先ず、この言葉では「スリー（揃う）」と「ユーレー（辞典による、寄り合い）」が使い分けられている事。そして言葉の意味が「ユイマール」の精神を明確に示していることである。（この事については、後で述べる）

（3）郷土史辞典（本土の地方辞典）

両語の違いを述べた県内資料は見つからなかったが、「郷土史辞典」（注、日本全体の郷土としての、即ち全国地方語辞典）に次のように記載されている。

【もやい】共同、共有、共同生産を意味する。モヤ・モエ・モヨイなどと訛る。（この「モエ」が

沖縄方言の「ムエー」であることは容易に理解できる)

日本の共同慣行は大体モヤイ・ユイ(交換共同制)、テツダイ(無契約共同制)の三種があるが、中で最も共同性が強く、かつ漸次影の薄らいでいくのがモヤイである。

「モヤイ」は「ユイ」と違って労力の上での貸借の関係が生ぜず、心安いもの同士の間で隨時結ばれる。道普請、橋普請、堤浚いのほか、神社の祭札をも含めて村仕事はモヤイで行われるのが多い。

【ゆい(結い)】結う、結ぶ、結合共同を意味する。労働慣行においては労働力の交換を指す。ユイコ・ユー・エイ・イイなどと訛る。

「ユイ」は一家独力では困難な仕事全般にわたって結ばれ、屋根葺きから葬式までユイを結ぶ土地がある。金や物で相殺しないのが特徴である。

即ち両語とも労働経済時代の共同作業の区分用語であるが「もやい」は公共的な労務提供で労力の貸借は生じない。その代償はその施設の利用又は参加することによって報われる。

一方「結い」は個人生活上の労力提供で、互いに「お返し」即ち、労力の貸借が発生し、その返済・交換が連結して行われる。従って自分の提供した労力もこの「結い」によって受けることが出来る。言葉で表すと「結いが回って来る」事になる。

このことを沖縄方言にしたのが「ユイ・マール」だ、と気付いた。

また「イイ・マール」と呼ぶのも、その訛りであって同一語である事が分かった。終戦後の一時、この共同作業で順順に各人の仮住宅を建て合い、戦災からの復興が始まったのも記憶に新しい。

そして、この「ユイマール」は今でも砂糖きびの刈り採り作業だけでなく、各種の集団作業用語として定着している。

これで、「コー(講)ムエー」などと称する公共的な活動を目的とした「ムエー」の語源は「もやい」で、私生活の相互扶助や親睦を図る為に行う「ユレー」の語源は「結い」であることが分かった。

模合と言う語の成り立ち

戦後、何時の頃からか「ムエー」「ユレー」の代りに「模合」と言う語が一般語になった。戦前育ちの者には今でも、この「ヤマトウ・グチ」は馴染にくい言葉で、内容が違うものにさえ感じる。

然しながら、前に述べたように「模合」と言う語は琉球王朝時代からの公用語で、置県後「模合取締規則」と言う県条例も公布されている。

また、新聞記事もすべて「模合」が用いられているから完全な標準語であった。

然も、大正の初期から戦時中に掛けては「標準語励行」の最も厳しい時代である。だのに、何故か一般庶民は、このヤマトグチめきたる「模合」と言う語を口にしなかった。

さらに不思議に思われるのは、この「模合」と言う語が一般語になったのは戦後「ムエー」が実質的には死語になってからのことである。

それで、振出しに戻って「球陽」にある「模合」を再度検討して見る事にした。

先ずは、桑江克英先生の訳による全文を拝借することにする。

「初メテ模合法ヲ立テ以テ貴家ヲ助ク。」（尚敬王21年）

本国農夫工商ハ、各々其業ヲ修メテ多ク資材ヲ備フ。早潦ニ遇フト雖ドモ、以テ之レヲ防クニ足ル。士臣ノ家ニ至テハ、地頭職並ニ知行高ヲ頂戴シテ、深ク聖主ノ隆恩ヲ蒙ル。潜カニ士業ヲ修メテ、風雅礼法甚ダ以テ觀ルニ足ル。但タ之レヲ欠ク所ノ者ハ資材而已。是ヲ以テ国相法司、初メテ模合ヲ設ケ、地頭所並ニ知行高ヨリ、米若干ヲ出シテ、倉敷ニ交納セシメ、或ハ二三十斛カ、或ハ四五十斛カ、毎年輪流、以テ一人ニ給シテ各家ヲ相助ク。四五年間ヲ以テセズ、以テ財聚リ資用スベシ。故ニ初メテ此法ヲ立ツ。

この法が制定されたのは学術、経済、外交等素晴らしい政治が行われると共に「組踊」の創設、絵画彫刻その他工芸の発達を図る等、華やかな琉球王国が現出した黄金期で、即ち、各方面に人材が輩出した時代である。

然し乍ら、当時の王府は薩摩の琉球入り以前から借財に悩む「慢性赤字財政」で、この様な人材を育てる予算は無かった、と思われる。

そこで考え付いたのが、この「民力による人材育成法」だった、と考えられる。薩摩藩の「享保の大御支配」にもこの方法がある、とのことであるから、或いは薩摩の指示でこの「法」を制定したのかも知れない。

その動機は別として、私はその受給対象者を考えて見た。

先ず一般平民（いわゆる百姓）にも生活に困って居た人は大勢居たはずである。それを外して士族（サムレー）だけにしたのは何故か。

而も、法名に「貴家」と言う文字を掲げ、更に「風雅礼法甚だ以て觀るに足る」との賛辞に該当する者、と言えば「名門の出」の「スグリ・ムン（優れ者）」と言うことになる。

それで、私はこの法の目的は、「米ムエー」による「人材育成」ではなかったか、と考えた。

それによって有能の士を修業に専念させ、その大成によって国政を営み、外交を密にし、民政が安定すれば正に国家的に大きな「ムエー」である。

従って、単なる貧乏士族の救済では無かった、と思う。

うがって言えば、倉庫に集めてから支給したと、言うことは今様での大蔵省で徴収した税金を文部省から「奨学資金」として支給することになり、受ける者としては国（王様）からの「賜りもの」である。従って「隆恩を蒙る」感謝の心が更に深まり、その報恩が国の経営に大きく貢献された

思う。

これを、供出者から受給者の納屋に直接納めさせると、貸借の形になって「結い」と同じく返済が必要になる。仮に「返済に及ばず」としても個人的な債務感が残り、人間関係で支障が生ずる事にも成りかねない。

琉球王朝史に輝かしい実績を残した尚敬王代の素晴らしい人材は、この様にして生まれたのではなかろうか。

なお、供出に「米」を用いた。とあるから当時は未だ貨幣経済が発達していない時代であり、「結い」は労働の「ユイマール」だけで「ユーレー」と言う語は未だ生まれていなかった、と思われる。

即ち「模合」は「ムエー」だけの語源で「ユーレー」は含まなかった筈である。

貨幣経済に移って「ムエー」にも一部の給付が生じて「ユーレー」と同じ形になり、区別が付かなくなると共に私欲の増長となり、それを規制したのが、大正6年(1917)公布の「模合取締規則」であるが、この「模合」と言う用語は「球陽」の語をそのまま採用したと思われる。そして、この条例は全文が届け入れ義務と制限規定だけで「模合」の定義は記載されていない。

戦後、ウチナーグチの衰退と共に皆が字の読める世の中になると、意味も本質も分からないままに「模合」が一般語になり、おまけに、その対語である「ユーレー」までも飲み込んで、庶民金融の総称語にまで昇格?した、と言う事になる。

ムエーの移り変わり

集団社会を営む上での生活の知恵として生まれた「ムエー」は、共同、共有、共同生産を行う手段として時代と共に幅広く行われる様になったと思われる。

労働経済時代には地域の人たちによる「人足(ニンスク)ムエー」で道路、橋等の公共工事や「ムエーヂー(模合地…共有地)」の開墾作業、それに村の祭や神事等の催しも行った、とのことである。今で言う「勤労奉仕」である。

物流時代になると、農産物や家畜の提供なども加わり、それぞれ持ち合う品物の名を付けて「米ムエー」「茅(かや)ムエー」と呼び、これらの共同事業は益々発展したのである。

さらに貨幣経済に移ると、その供出物が保管、交換、運搬に簡便な「現金」に変わった「ムエー」は、その活用が飛躍的に拡大され、社会経済の発展に対する貢献度も高くなったのは当然である。

その活用は、時代の進展に伴って政治、経済、社会の全般に広がって多様化し、その目的、用途によって独立した固有名詞を持つようになった。

例えば「人足ムエー」に代表される道路や橋の公共工事は「税金」と言う名の供出金になり、また、同業者仲間の「ムエー」も「組合費」「会費」となった。

現在の漁協、農協、信協その他の各種組合も「協同組合」と言う名が付いていることで「ムエー」

の活用である事がわかる。

また、財団、社団の法人組織で運営される公益団体、私立学校の学校法人も「講ムエー」に属する公益団体で、その運営資金も「賛助金」「寄付金」「補助金」等と出資名称が変わったが、「ムエー」からの発展に外ならない。

この様に社会の近代化によって「ムエー」と言う一般語は次第に民衆から遠ざかっていった。前述の「もやい」の解説で「漸次影が薄らいでいく」と言うのはこの事を指していると思う。

それでも戦前の沖縄では、この共同、共有の組織の「ムエー」が営まれていた。後で紹介する「講ムエー」、「ムエー」で建造した「ムエー・バカ（共同墓）」「龕（がん）ムエー」で出来た共有の龕（遺体を運ぶ霊柩籠）、「サーター・ムエー」で出来た共同精糖場等である。

また、その目的が広く、単独の名称では表現出来ない場合は「ヒャクワナー・（100貫〈2円〉）ムエー」等と金額で呼ぶ場合もあった。

ムエーとユーレーの混同

ムエーはその目的や金額に「ムエー」の名を付け、公共的な共同、共有組織であることを示し、個人の生活相互扶助組織である「ユーレー」との区別をしたのである。

然しながら、戦前この様にはっきり区別して運営したのは那覇の郊外や地方町村だけで、市内の中心街では大正年間頃から「ムエー」と「ユーレー」が混同していたと思われる。

そしてこの混同は後で述べる「模合崩れ」「悪徳模合」の原因になったと考えられる。そこで、この両語の混同、混用の原因について考えて見た。

まずは経済用具の変化である。労働経済時代の提供物は形の残らない「労力」であったから綿密な計算は要らなかった。

それが貨幣経済になると「出資高」「残高」などの記録、計算が必要な「金銭」になったのである。「労働（提供物）の貸借（交換）」で営まれる「結い」の場合は至極便利になったのは当然である。

一方金銭出資に変わった「もやい（ムエー）」はその目的とする物件が完成しても、事後の管理、運営の為に続けられるのが普通である。

然し、その後の積立金は少額で足りるから残りを「割戻し」として籤などで還元するようになり、それが通例になると共に「ユーレー」と同じく競争入札も行われるようになった。即ち「提供物の貸借関係が生じない」決まりの「ムエー」が「ユーレー」と同じ仕組みになって、区別が付かなくなったのである。

次に考えられるのは、用語解釈の不明確である。

前に述べたように、辞典によるとこの両語はもとより、「模合」も「頼母子」も「無尽」も全て同じだ、との解釈である。

「模合」と言う語は戦前から公用語であり、標準語であった。しかし庶民は「標準語励行」を強

要された時代でも「ムエー」「ユーレー」の方言で押し通した。

ところが戦後になって、皮肉なことに、実務的には「ユーレー」を営みながら、「死語」になった「ムエー」のヤマトウグチである「模合」がこの庶民金融の「代表名詞」になり、「ムエー」と「ユーレー」との区別が不可能になると共に「ユーレー」の本質までも曖昧（あいまい）にしたのである。

ユーレーとは、その本質

労働経済時代の「結い」による相互労務提供は現在でも「ユイマール」として続けられている。

私たちの先人は貨幣経済に移って提供物が「現金」に変わってもこの麗しい共助精神は変わらなかった。むしろ交換の対象物が「労働」と言う単一のものから、自分が必要なものに交換出来る「現金」になり、然も「貯蓄」する事も出来るようになって活用度が広まり「結いの心」は益々強くなった。

それで、その供出現金には「結いの心」を込めて「結いの代金」と呼ぶようになった、と考える。

この「結い代」の沖縄方言が「ユイ・デー」で、首里では「ユデー」、那覇では「ユーレー」と訛って一般語になった。と言うのが私の見解である。

「模合は親睦、助け合いの庶民金融である」と言う定義は今でも変わらないからである。お金を出し合っただけの、単なる「寄り合い」とは違うのは明らかである。

「ムエー」も貨幣経済に移って金銭の出資、積立てに変わったが、「墓ムエー」「サーター・ムエー」等とその目的に「ムエー」の名を付けるだけでよかった。(実務的にも労務提供のムエーは廃れていった)

然し乍ら、「結い」は労働経済時代の「ユイ・マール」が現存しているから、その金銭化には別名を付ける必要があったのではなからうか。

従って、「ユーレー」は「結いの心」を持つ「ユイ・マール」の姉妹語である、と考えられるが如何であろうか。

では、その本質は何か、どうあるべきか、を考えて見たい。その為に再び亡母の言葉を引用する。

「カキメーン ウクイメーン スリラワル ユーレーヤル」の「スリラワル (揃ってこそ)」には重要な意味が含まれているからである。

その意義は「ウクイメー (送り前…給付済み口) の滞納、不納は当然非難されるが、カキメー (掛け前…未給付口) の滞納、途中脱会も同じく悪い」と言うのである。

例えば、10人の仲間で月1万円会のユーレーを始めたとする。

ところが、途中でカキメーの人が何らかの理由で、今までの出資金は要らないから、と脱会を申し出たとする。

本人は「自分が出した分は寄付したことになり、誰にも迷惑を掛けていない」と主張する。計算面で考えると、その言い分は確かに正しい。

しかし、「結いの心」で始めた「助け合いの共同体」としてはどうであろうか。

発会の時には（或いは途中からでも）各人には何らかの資金計画があった筈である。それがこの脱会者の為に総口数が減って給付金額が少なくなり予算が狂うことになる。即ち、一般的には遅く取る人が利息の加算で給付額が多くなるが、この場合は反対に遅い人程手取り金が少なくなる、と言う逆現象が起こり、それが落札競争、「模合崩れ」とつながる訳である。

解散にはならなくても、途中脱会者の残した金の処分などで仲間同士に金銭上の問題が生じて、人間関係にひびが入り、目的である親睦を壊す事にもなる。

このことは「ユーレー」の原点である労務の「ユイ マールー」に置き換えたら、説明の必要が無いほど明らかである。

つまり、10人の仲間で「結い」を組み、家造りを始めた。ところが、3人目の家が完成した頃に未だ造っていない或る1人が脱会したとする。

それで次からは9人になり、さらに脱会者が出ると段々減って僅かな人員になると家が造れなくなるのは当然である。

前に述べたように、皆が最後まで足並み揃えて続けるのが「結い」の倫理であり、「ユーレー」の本質である。

一方「ムエー」で未給付者が途中脱会した場合に残した金銭は、寄付の形で講仲間の基金に加えられ、本人は共有物の利用権や行事への参加資格を失うだけで、誰にも迷惑を及ぼす事は無い。

給付済みの途中脱会は勿論仲間に迷惑を掛ける。然し乍ら、その間に目的遂行の為に積立てに廻した分もあるから損害額は「ユーレー」よりも少なく、また、次回からの積立てを減らして給付額を維持する様に調整し、又は会員を補充して規模を維持することが出来る。

このムエーで造成された資産、特に土地は何時までも残るから、会期を4、5年毎に更新して会員「コーシンカ（講仲間）」は子、孫と類代的に引き継がれ、終わることが無い。現に私の故郷で戦前この「コー・ムエー」で出来た倶楽部（公民館）が戦災で建物は壊滅したが土地が残り、数年前に「講」組織を復活し建物を取得して共同の福祉活動の場として再生することが出来たのである。

戦前の模合（1）概要

「親睦を深め、相互扶助を行う為の庶民金融である」と言う「ユーレー」の定義は「模合」の語に変わっても昔と変わらない。

しかし、第2次大戦後の「模合」は社会組織の変化や経済の進展に伴って、その活用、運営の方法に戦前と多くの変化が見られる。

それで、この定義を確かめるために、私の生地である旧那覇市前島町（俗称、泊兼久）での戦前の「模合」について記して見たい。

（以下、記述を簡便にする為に「ムエー」と「ユーレー」を特に区別する必要が無い場合は、この両語の総称語として「模合」の字句を用いる事にする。）

昭和19年は琉球藩が沖縄県になった明治12年から数えて、65年目に当たる年である。然し、明治生まれの庶民の間では金銭の数え方は未だ旧来の「貫(くわん)」「文(もん)」に換算して唱えていた。

このことから生活文化は未だ王朝時代の名残りがあつた事が考えられる。

従つて、終戦に至るまでの「模合」に対する考え方や運営方法も、旧藩時代と大差が無かつたと思う。

構 成

行政上の最小区分は首里・那覇では「丁目」、地方では「字(あざ)」であつた。しかし、この地域範囲は日常のコミュニケーションとしての生活圏には、広過ぎて行き届かない面が生じる。また、「向う三軒両隣」の「チューケー・トゥナイ(隣近所)」では世帯数が少なく効果が薄い事になる。従つてその中間程度がこの生活共同体の組織として最も適当な範囲となる。

この範囲を「チンジュ」と称し、それが一般模合の構成地域単位であつた。

「チンジュ」は「近所」で「丁目」を更に「アガリ(東)」「イリ(西)」或いは「メー(前)」「クシ(後)」などと区分した区域で、大凡30~50世帯で構成され、「模合」の地域としては丁度手頃な範囲であつた。

当時は社会保障制度は全く無く、その上庶民は一様に貧しい暮らしであつた。例え広い家・屋敷(土地)を持つ旧家であっても、現金収入がなければその暮らしは貧乏人と変わらないからである。

従つて、銀行は庶民には全く関係の無い存在であり、頼れるのは自分たちの力だけであつた。

「模合」は、この「貧しい者同士が肩を寄せ合つて、助け合う組織」としての生活の知恵で生まれたものである。

それに、ラジオも未だ普及されて無く、新聞の購読さえチンジュ内では2、3軒ほどで、然も字の読めない人も多い時代であつたから、模合の場はあらゆる情報源であり、また、家庭療法や、ヤシチヌ・ウグワン(屋敷の御願)の願文などの伝授、その他種々の生活知識を得る等の生活学級でもあつた。

従つて、「模合」への加入は家庭生活にも欠かせない組織であつた。

最も不可欠な模合は葬儀費用などを常備する「講ムエー・グワー」である。

その他、主に親睦を目的にするユーレーには、戸主の集い、主婦の集い(アンマー・ユーレーグワー)、青年の集い等種々あつて、その構成によって適当に名付けられ、1所帯で2、3種の模合に加入するのが普通であつた。

発 会

加入者の募集は数人の発起人によつて行われ、発起人はそのまま「ティムトゥ(手元)」として最終まで責任者となつた。従つて現在の様な単独の手元と言う発会は無かつた。

なお、現在、発起責任者を指す「座元」は、当時は模合の場を提供する家の主（模合座の主）のことであった。（座元が手元の一員であることもあった）

発起人はチンジュ内で信望の厚い、面倒見の熱心な人が推薦されて構成された。

一口の金額は「講ムエーグワー」が30銭程度、大口模合でも2円が最高で、男のユーレーが50銭から1円程度、アンマー・ユーレーグワーは10銭が普通であった。一人前の男の日給が1円程度の時代の事である。

期間は大凡1年が基準で、人員（口数）が多ければ回毎の給付人員を増やし、小口の場合は月2回開催とするなどして期間を調整するのである。

（「講ムエー」と「ユーレー」の違いは、後でその実態を記載する）

給付の方法

受給希望者が2人以上の場合の競争入札は「受給額」記入方式で行われた。

つまり、「幾ら欲しい」と言う金額表示で、入札金額の少ない方が落札する訳である。それには「貸して下さい」と言う「願い入れ」の心がこもっていた。

常識的に考えると競争心理で少額給付を受けて大損をする人が出る事になるが、実際には掛金総額又は次点との差は極く僅かであった。

それは、大損をして落札する人は「ユーレー・サギヤー（下げ屋）」と呼ばれ、「入札相場を崩し、仲間に大損をさせる者」として非難され、次の発会から外される程であった。

模合加入のボイコットは、村八分にも等しい罰であった。地域からの孤立生活者となるからである。

また、この様な浅はかな行為は、チネームチ（家計持ち）に締めりが無い者（経済観念の薄い人）と見做されて侮蔑の対象にもなり、人格、素養全ての点で社会的な批判を被ることになるのである。

総額と落札額との差は「ウティグワー」と称したが、出席者の茶菓子代の足しになる程度の少額で、とても配当に回す様な額では無かった。

「ウティ」は「ウティ・チリ（落ちて散り…落ちこぼれ）」の「ウティ」でそれに更に「グワー」が付くから「極く僅かな余りもの」の意である。

この競争入札は受け給者を公正に決める手段であって、未給付者の利益の為ではないのである。

給付を受けたら「送り目」となり、次の回から一定の利息（ウクイリー）を最後まで加算して納める。従って、回が進むごとに利息の分だけ給付対象額が増える訳である。給付を受けるには、最後まで掛金残額を記載した借用証書を入れるが、それには必ず保証人を立てる。保証人は原則として当人を紹介した手元である。

従って、この様な正式な模合には「模合崩れ」と言う事は無かった。

しかし、不納者の送り金を弁償する為に家、屋敷を手放す保証人も居た。

貯蓄、金融

この様に回が進むごとに手取り金が増えることになるから、心がけの良い人は、加入の時から目的を持ってその資金貯蓄に励むのである。

若い女の人は正月の晴れ着代や結婚費用の積立てに、子を持つ親は息子の進学資金に、と言う訳である。中には幾つかのユーレーグワーを最後まで掛け締めてその蓄積で家を新築する気丈夫なアンマーも居り、ほんとに「ジノー モーキスーバー ヤアラン、タミースーバードゥヤル（金は稼ぎ勝負ではない、貯め勝負だ）」の実践である。

カキメー（掛け目…未給付口）は一種の預金であるから、担保として利用することが出来る。

例えば緊急な支出で入札をしたが落札が出来なかった場合に、組仲間の人から自分の持ち口を担保にして、当日の落札額と同額の金額を借りるのである。

これを「チユクイ ミー（作り目）」と呼ぶ。非公式に「ウクイ メー（送り目）」を作るのである。

借り手は次回から他のウクイメー持ちと同じように、送り利息を加算した額を貸し手に払い、貸し手はその中からカキメー額だけを模合金として納め、残りは利息として自分の所得になる。

また、受給権は貸し手に有るから何時でも入札が出来るのである。

この方式の前借りを「チユクイミー キーン（貰う）」と言い、貸し手では「チユクイミー クキーン（与える）」と呼んだ。

然し乍ら、度々この方式で借金すると「チユクイミー キーヤー」即ち「前借り常習者」と呼ばれ、ユーレーサギヤー同様「経済観念希薄者」としての烙印が押され、信用を落す事になる。

また、未給付模合を担保に他の金融業者から借入れする事も出来る。これを「ユーレー ヒチムチ（質物）」の借入れと言う。

貸主は借用証を借主の承諾を得て、模合の書記に提示して入札権を持つのである。この場合の金融業者はいわゆる高利貸し（コーリガシー）であるから「チユクイミーキーヤー」同様仲間から良い印象を受けるはずは無い。

信用の尺度

昔から「金を持たせば人が分かる」と言われている。正に「ユーレー シミレー チュヌ ワカイン」である。

前に述べた信用を下げる行為には「ワカユーレー トゥヤー（若ユーレー取り）」と言うのもある。文字通り模合が発会して間もない（若い）時に落札する事が常習になっている人の事である。

しかし、なんと言っても最も悪いのは「ユーレー フノーサー」である。

この場合の不納というのは、模合を全く納めない、と言う意味だけでなく当日時間までに会場に納めなかった、すなわち遅納も含むのである。

「給料日の都合で1日遅れたくらいで、翌日わざわざ落札者の家に持って行った」と誠意がある

ことを弁解しても駄目である。

先に述べたように、皆が決まった場所に同時に所定の掛金が出揃う。と言うのが模合の鉄則である。

従って、前以て掛金を準備することが、信用を維持するのに最も大切な事である。ところが、それほど注意を払っても資金準備が狂うことがあった。

その多くは新暦と旧暦の違い（一般庶民は旧暦を使用）、曜日の不認識がその原因であった。

例えば、息子の給料日が丁度模合の日で安心していたら、それは新暦でその日の模合（旧暦）には間に合わなかった。（当時はトゥカ・カンジョウ…10日勘定〈10日毎、つまり月3回支給〉の制度もあった）

或いは、出稼ぎの娘から郵便為替が届いたので、午後取りに行ったら土曜日で郵便局が閉っていた、等である。

このような場合には事情を話して、親しい人から一時融通して貰う外に方法は無い。貸す方も「私も明後日のユーレー ズン（金）だから」と念を押して立て替えてくれるのである。勿論、普段信用があつての事である。

また、何時もはぎりぎりの生活をしていても、特別に入金が有った場合は、前に貸してくれた人に「ユーレージノー シコーテーミ（模合金は準備出来ていますか）」と自分で進んで貸す場合もあった。正に「持ちつ持たれつ」の相互扶助精神である。

「シートゥ ヤンメーヤ カクスルムノーアラン」と言う言葉がある。

シーは債務、ヤンメーは病である。ヤマトゥ グチにすれば、「借金と病気は隠すものではない」と言うことであるが、この言葉だけでも当時の人情と貧困の様子が理解できると思う。そして心のこもった助け合いが為された。

この様な相互扶助も、先ず、模合を通じての平常の信用があつての事である。

情報交換、伝統の継承

前に述べたように、ラジオも無く新聞にも縁の薄い庶民にとっての情報源は人との交わりだけであった。

この情報授受の場としてのユーレー ザー（座）の役割は大きい。

子供たちが学校や新聞等で得た話の受け売りは勿論、アチネーサー（商売人）が那覇で聞いた話、ヤマトゥ帰りの娘の話による本土の様子など、ニュースの殆どはこの模合の場でなされた。

更に大きい役割は「伝統の継承」の場であった。

一般的に伝統の経路は「祖父母から聞いた話」などと身内が主体になっている。

その祖父や祖母は自分が先祖から受けた慣わしや知識の外に、この様な模合の場から仕入れた情報も持っているからである。

昔から伝わる生活の知恵の伝授の外に、現在、黄金言葉（クガニ クトゥバ）と称する諺や、歴史もこの模合座で話し継がれたものが多いと思う。

文盲の庶民の情報取得は耳しか無かったからである。

つまり、模合の場合は、古代日本の「語り部」の役割も果たしていたのである。

前に「ユーレーの本質」で述べた亡母の言い伝えも、このユーレー ザー（模合の座）からの受け売りに違いない。

戦前の模合（2）事例

次に当時催された模合の実例を幾つかを紹介する。

（1）スーゴー・ムエー（総講・模合）

チンジュ（近所）毎に結成した日常的に起きる共同、共有の組織を「コー・ムエーグワー」と呼び、その連合体として組織したのを「スーゴー」と称した。

スー・ゴーは「総講」である。（総合とも記す）

以下、私の生地での「スーゴー・ムエー」に就いて記述する。

大正年代に部落内のチンジュ毎の小さい4つの「講」の上部組織として「スーゴー（総講）」を結成し、月2円の「ムエー」を始めたのがその創立である。

大人達は「スーゴー・ムエー」、子供達は「クラブヌ（倶楽部の）・ユーレー」と呼んでいた。倶楽部は現在の公民館である。

当時の大部分の戸主が加入していたので口数は百口程もあったと思う。

月の掛金は当時一人前の男子の2日分の給料に相当する2円の大金で、然も5年余も掛かる長期であったが、給付が一巡すると再び開始し、子、孫と引き継がれて昭和19年（1944）の10・10空襲で倶楽部が焼失するまで続いていた。

まず、初回の掛金は病気、災害などの緊急立替資金として保管される。

次回からの給付も一定の積立て金を差し引いてから行い、また、落札額との差額は積立てに回し、更に途中でも資金に充てる為に給付を行わない時もあった。

従って、給付金額は今までの掛金に足りないのが常識であった。然し、その間に受ける恩恵は金銭では計れない程大きかった。

この積立金で土地や建物を購入して倶楽部とし、各種の共同行事を実施すると共に共用備品を揃え、同時に相互金融も行なったのである。

倶楽部の敷地は約90坪（約300平方メートル）で、木造瓦葺きの建物は約30坪（約100平方メートル）もあって、当時としては堂々たる集会場であった。

部落のあらゆる行事の場所であることは当然であるが、泊小学校が昭和2年火災で全焼したときには、その分教場にも活用した程である。

広い前庭は子供たちの遊び場であり、立ち並んだ木麻黄の木陰はお年寄りたちの涼み場で、格好な世間話（シキン・バナシ）の集まり場にもなった。

共用備品はその種類、数量とも豊富で何時も整然と保管されていた。祝儀用には結婚式の三・三・九度の盃、新郎用の紋付の羽織、袴、山高帽まであり、食器類は朱塗りの各種の椀、膳、大中小の各種の皿、紅染めの箸までもあった。

葬祭用具では鯨幕、黒塗りの食器類、チャンサー（身内の女性が顔を隠す為の芭蕉布で作った着物風の被り物）まであり、火消し用の鳶口、ロープ、はしご、大太鼓、ムラガニ（ドラ鐘）等も常備されていた。

大太鼓は子供たちの勉強時間の知らせに、ムラガニは大通りの水撒きの合図に、打ちならされるが、それらは中学生（今の高校生）の役目であった。

春の新学期前に倶楽部で催される「学事奨励会」は子供たちにとって最高の催しであった。

終業式が済むと通信簿を出し、成績に応じて学用品の賞品を与えるのであるが、成績が良くなくても進級賞があり、それに学校での総代による授与ではなく一人ひとり名前を呼ばれて、大きな賞の朱印が押され、自分の名前が筆で書かれた熨斗紙包みの帳面を、長老から頂く感激は小学生にとって何にも優る喜びであった。そして、それらの準備はすべて中学生（今の高校生）によってなされた。

また、「倶楽部」を利用しての小学生の補修教育や中学への受験勉強など、後輩の指導も中学生の奉仕でなされた。中学生は「奉仕の誇り」を得ると共に、その自覚によって模範を示す位置になり、自分も悪いことは出来なくなるのである。

従って子供たちからの信頼度も高く、「長幼序あり」の社会秩序や「後輩愛育」の美風が育つことになる。

この「躰（しつけ）教育」は次々と後輩に引き継がれて伝統となったのである。従って、現在大きな社会問題になっている「いじめ」や「登校拒否」「夜遊び」等と言う問題は入る隙間も無かった。これだけでも、この「コー ムエー」は偉大な存在だったと思う。

その共有地は先輩たちのお働きで戦後も所有権が得られ、建物も取得して「兼久倶楽部」として復活することが出来た。

そして、当時の住民の「心の拠り所」となり、昔の美風を伝えると共に地域住民の福祉施設として有効に利用されている。

（２）その他のコー・ムエー

「講（コウ）」は部落単位だけでなく、同業者、一門など、要するに目的を同じくする者の共同行為であるからその種類や運営方法も多い。

これらのコームエーは人的構成が主であるから、地域も広がるのである。

同業者の場合はせいぜい隣の字に股がる程度になるが、「一門ムエー」の場合は各地に点在しているから、季節毎の年に数回の集まり、と言う事になる。

「墓ムエー」で有名なものには、糸満の幸地腹門中の「一門墓」がある。

(3) ユーレーグワー

ユーレーグワーの実例として1口10銭の、いわゆる「アンマー（主婦）ユーレーグワー」を紹介する。

一人前の男の日給が1円程度の頃だから、10銭でも適当な模様が出来たのである。金銭の数え方は未だ「貫」「文」であったから「グクワン（5貫もの）ユーレーグワー」と呼ばれた。

以下は私が中学時代のアルバイトで、フィッシャ（筆者〈書記〉）としての体験記である。

まず、チンジユの顔役数人の話合いで、「一口グクワン（5貫…10銭）、月2回（旧暦の1日と15日）、座元（場所）はポーポーヤーのパーパー（お婆さん）宅」と、簡単な取決めで創立の動議が成立する。

期間が1年くらい、給付は手取り額入札制、送り利息を1割（1銭）、時間はユバン・アトゥ（夕食後）等の細かい規定は常識として既に定着しているから、改めて決議する必要は無い。（当時は普通の家庭には時計が無かったので、時刻の取決めは無意味であった）。しかし、どの家庭でも同じ生活パターンであったから集まり時間に大きなずれは無かった。

さて、数名の発起人はそれぞれ5、6人の会員を募集する。募集と言うよりはお知らせである。前述の様にこの種のユーレーグワーは地域社会の生活では欠かせない組織であるから皆が参加を希望するのである。

しかし、発起人が信望の無い人の場合は入会希望者は無く、また、前に「ユーレー・フノーサー」「チユクイミー・キヤー」などと批判を受けた人は「満口になった」とか、適当な理由で断られる事がある。

従って、発会の時から強固な組織が出来上がる訳である。

会員の数は40人から50人に達することもあるが、各回毎に3、4名づつの給付をする等調整して1年程で終わるようにする。

ところで、字を知らない（小学校も出てない）アンマー達の集まりであるから、皆に納得のいくように、形で示す小道具と特殊の方法が必要である。

まずは、ユーレーフダ（会員の名札）である。

名札は竹で作った幅2センチ長さ8センチ程の短冊型（竹トンボの未完成品の形）で、フィーフチ（火吹き竹）の廃品等で作った。

さて、いよいよ発会。当初の数名の発起人は其の俣「テムトゥ（手元）」として運営責任者になる。

全口の掛金が集まるのは当然であるが、手元がその紹介した分を取りまとめて持参するのもあるから、全員が集まることは滅多に無かった。

書記（フィッシャ）は先ずノートに会員名を記録し、早ければその日のうちに竹の名札の表に屋号入りの氏名を毛筆で記入する。金城カメとか、知念ウシ等同姓同名が多いからである。そして、左下に責任者として紹介したテムトゥの氏名を記入する。（札は座元で前以て準備される）

次の回からは書記は予め畳の上に並べておいた名札を、入金に従って取り上げて帳箱（書類箱）

に納める。相当の時間がたっても量の上に残った名札があれば、その手元が立て替えて納めるから回ごとに満額納金になる。

さて、いよいよ入札である。文字の書けないアンマーたちの入札方式、これがなかなか面白い。

まず、入札希望者にはパナマ帽子の材料の切れ端が配られる。当時の紙を加工した代用品であったが、大抵の家庭では婦女子が内職として帽子編みをしていたので、手軽に得られた。これをゲンロー（帽子の原料の意）と呼んだ。各人はラッチョーグラーを噛み、黒砂糖を舐め、シーミーチャーをのどに落としながら、或いは他人にはシキンバナシ（世間話）に夢中の様に見せながら、手の裏では「ゲンロー結び」に一心になるのである。

ゲンローでの金額は古代のスーチューマーに属する「結縄式」で表示する。

この様な少額のユーレーグラーの場合は、二重にして結んだのを1つ100貫（2円）ひと重結びをトゥナー（〈10縄〉10貫、20銭の別称）とする。（高額の場合は二重結び10円、一重を1円などと桁を上げる）

結び終わった「ゲンロー」は手で丸めて書記の前にポイと投げ出す。

書記は席の順序にそれを並べておき、どれが誰の入札であるか、間違わない様に気を付けなければならない。

然し、紐の結びが最低20銭単位で、端数が無いから競争金額は表示出来ない。

そこでその補完として「クチウテー（口唄い、即ち口頭表示）」が必要になる。例えば、ゲンローの結びが二重2つ、一重3つ（合計で、4円60銭）で、それにクチウテーで「ウリカラ・サングワン・グヒャーク、ピチヌ、イックワ・タクミーグンジュ、アギ（それ〈結び〉から、3貫500〈7銭〉引きの、1貫2塊（クムイ）50〈2銭5厘〉上げ）」と発言する訳である。

この様に引き算を先に、然も加える数よりも多くして他人が暗算では計算出来ないようにするのは一種の作戦で、皆をトゥヌー・マヌーさせ、大笑いのうちに書記はヤマトウグチの数字に翻訳して算盤で、 $4.60円 - 0.07円 + 0.025円 = 4.555円$ と計算して落札を発表する訳である。

この人が落札した場合は、銭未満切捨てで給付額は4円55銭となる。

書記はノートに借用証を作り、金額と落札者・保証人（原則として、その手元人）の氏名を記入し、拇印を押させ、もう一冊の記録帳に当日の総入金額、落札額、残金の処理などを記入する。落札者の名札には氏名の上に○印を付け、給付済みで次回から利子が付くことを表示し、裏には日付を書き入れて当日の事務が完了する。

春や秋の娯楽シーズンになると、給付をしないで3月のハマウリー（浜下り）や芝居見物に充てることが通例であった。

人気役者の出演による有名な歌劇などが上演されると、誰かが「タメー、トーチ、トゥマイ・アーカー、ンーダナ（2口倒して〈崩して〉泊阿嘉〈劇の名〉を見に行こうや）」と提案すると全員大賛成で即時決定である。

アチネー・サー（商売人）は、仕事のついでに芝居小屋に寄り予約を取付ける。劇場も団体割引で大サービス。暇のある人は2時間も前に行行って席取りの役を引受ける。ポーポーやまんじゅうを

買って昼からマチカンティーするなど、皆、心ウキウキである。

テレビは勿論無く、ラジオも一般の家庭には無い時代で、ヤマトウグチのクワチドー（活動〈映画〉）にも縁の無いアンマーたちの楽しみは、この芝居見物と3月遊びだけであり、それだけを目的にユーレーに加入する人もいる程であった。この様な催しで掛金回数が増えるから、結果としては割り勘で観劇や、レクリエーションを催したことになるが、一体感の強化は会費制の比では無い。

この様に親睦を深めながらも、自分の晴れ着代、子供の入学準備金、豊の表替え代等目標を立てて加入するチネームチ（家計持ち）優等生の主婦も数多く居た。

また、ユーレーグワの座は社会情報の交換場であり、長老からの伝統の受け継ぎ、家庭療法の伝授その他生活の知恵の取得など数知れないほどの役割を果たし社会生活に欠かせない場でもあったのは前述の通りである。

総金額と落札額との差額は積み立てて置いて給付人員を増やすか、少額の場合はテンブラやアミグワを買って皆で食べる事もあり、書記に「勉強の帳面代」としてプレゼントすることもあった。

書記の手間賃や座料は現金ではなく、共に無償で2口づつが与えられ、しかも給付を受けても無利子であった。たった2時間程度の事務で、漬物やお茶等を提供する座料と同額では高過ぎるが、学費補助の恵みもあったと思う。

お陰で無事学校を卒業することが出来た。当時を思い出すたびに感謝の念が湧いて来る。

戦後のユーレー

貧しい者同士のささやかな助け合いの金融組織として育った「ユーレー」は、戦後庶民の生活の向上、社会保障制度の発達で相互救済が要らなくなった。

然し、先人の残したこの「結いの心」は社会生活での親睦を深める集いとして、また、企業の間での資金融通の相互組織として引き継がれ、幅広く活用されるようになった。

時代の進展によって運営の方法等は多くの変化が見られるが、その事については後で述べることにして、この項では戦後のユーレーの動向だけを記すことにする。

（1）親睦模合（ユーレー・グワ）

現在、学校の同期生や友人、職場仲間、近所などで主に親睦を目的に行われている一口1万円内外の、小口の「ユーレー・グワ」がそれである。

戦前、狭い地域だけの集いとして行われたのが、交通の発達で広い範囲に点在する同郷人の「郷友会模合」などもあり、益々発展する勢いである。

単なる「寄り合い」と違うのは、持分の掛金を当日是非持参しなければならない、と言う厳しい「結い」の決りがあって、それが団結を強める基礎になっているからである。

先日若い人に「模合とは」と質問したら「集まって酒を飲むこと」という言葉が返ってきた。期待はずれの返事に一瞬首をかき上げたが、それが親睦を図る基礎であることに気付いて納得した訳で

ある。

高校の同期生仲間で月1回定期で輪番制の当番が会場（主に居酒屋）を決めて集まり定額の模合金を出し合って籤で給付し、最終まで無利子だとの事である。当日の飲食費は割り勘で済みますから給付金はそっくり手に入ることになる。

また、給付分を旅行やピクニックの費用に当て会費制では味わえない「ユーレーグワー・シンカ（もあい仲間）」親近感、一体感が益々深まっていると言う。

県外でも盛んに行われ「ウチナンチュの居る所、ユーレーあり」と言われる程の発展振りであるから、親睦、団結を深める集いとして最も適した方法である。私たちウチナンチュの誇るべき風俗として、何時までも続けたいものである。

（2）企業模合（会社のユーレー）

関係企業間や得意先との間で、親睦を兼ねて行われるのがそれである。

企業はその大小に関わらず、設備の改善や季節資金などで銀行借入れだけでは賅えない資金が必要である。その資金調達の手段に用いたのがこの「ユーレー」である。

先に述べた、本土復帰直後などの経済混乱の中で、数多くの企業倒産を防いだのはこの、沖縄特有のユイマール精神による「ユーレー」の力であった。

一般にこのような企業救済の為に発会する場合は、当該会社を手元として発会させて初めに給付すると共に最終まで無利子とする、いわゆる資金援助型模合である。この場合は手元は当然運営事務と共に給付口の保証人の一人（他の会員からも一人）となり最後まで責任を持つ事になる。

合理的な運営方法と見られる某グループのユーレーを紹介する。

一口300万円の12口で、昼食会を兼ねての月1回開催、受給付者が負担する運営費、いわゆる「座料」は5万円、但し実際の座料の実費を差し引いた残金は積立てとする。昼食会を兼ねた集いであるから飲食費は大して掛からないから、積立て金は親睦の団体旅行費の一部に利用される程の金額になる。この団体旅行はグループの一層の親睦・協力を図るのに効果があると思う。

それに、給付の方法が合理的である。入札は「配当額記入方式」即ち「未給付一口当たり00円宛配当」の表示であるが、無茶な競争を防ぐと共に適正な利息を保障するため最高額と最低額の取り決めがあり、それに沿わない入札は無効である。また、緊急の度合いで譲り合う場面もあって、和やかな経営懇親会ともなる。

受給者の決定は前入札制である。つまり、各回毎に次回の受給者を入札で決める方式である。従って受給者の手取り額も未給付者の掛金も前以て決定する。

この方法によれば、未給付口は次回の配当額を差し引いた額の小切手を持参すればよい（定額を納めて配当金を受ける手数や事務が省かれる）そして落札者は入金が増えるから、資金繰りが確かになる。

買掛金の請求を受けて「次の模合を取って払います」と約束し、それが外れて信用を落す場合があるが、この「前入札制」では約束が果たせる訳で信用の保持にも適切である。

本土復帰直後に発足して20年余、毎年更新して続けているこのグループが隆々と栄えている事を知り、ユーレーの威力を確認した思いである。

なお、最近新聞に社会問題として報道されている「模合」は、単なる「利得競争」いわゆる「悪徳模合」であり、「結い」の心を持つこの「ユーレー」とは全く異なるものである。

悪徳模合

本来の基本である「結いの心」で営まれる模合は、前記の通り社会的にも有用である。然し、貨幣経済の発達は際限の無い人間の欲望によって「ユーレー」を在らぬ方向に運用する現象も現れてきた。

即ち「助け合い」を無視して、自分の利益だけを考える浅ましい人が出てきたのである。簡単に言えば「助け合い」の名目で「殺し合い」を演じる悪行者の出現である。

大正6年9月、県警察部は「模合取締規則」を制定して模合による多額被害者の続出を規制した、とあるから、この不道德の模合は昔からあった事になる。

これらを仮に「悪徳模合」と名付けてその2、3例を記し「ユーレーの本質」が何であるか、の説明に代えたい。

(1) トウン シジチャー (跳び退き)

昭和の初め頃、「昔はこう言うのもあった」と母の話で知った事であるから随分昔の出来事である。

「トウン シジチュン」は「飛び退く(のく)」で、模合の場合に例えると給付を受けた途端に脱会することで、いわゆる「食い逃げ」である。

例えば、10人で1万円会を開会し、籤(くじ)で第1回目の当選者は10万円をそっくり懐にして9万円のまる儲けで脱会。次の人は2万円(初回の分も含めて)で9万円取得の7万円儲け、と回が進む毎に給付額が減り5回目は6万円受けて1万円の利益となるが、6回目以後は欠損額が増えるだけである。当然、5回で崩壊、解散となる。

「模合」と言う名さえ付けられない悪質な行為である。

(2) ファイバー ユーレー

昭和12、3年頃に始まった悪徳模合の名称である。

「ファイバー」は、英語のステイブル ファイバー(略して「スフ」とも言う)で、木綿の代用品として戦時中(昭和11年頃)開発された化学繊維で、2、3回の洗濯で破れ、遊び盛りの子供には1か月も持たない劣悪品であった。

即ち「見た目は純綿(木綿)に似ているが実際は偽物」と言う事で「いんちき」の代名詞になった。言い替えれば「似て否なるもの」の意である。

つまり、形だけは「ユーレー」に似ているが、実際は自分が配当金を多く得るために入札競争をさせる私欲行為だ、と言うのである。

入札の結果は落札者だけが発表され2番札以下は秘密にするのが建前であった。

それは2番札との差が多額の場合に、落札者に損失感を与えない為であるが、それを悪用して、如何にも緊急な資金の必要が出た、という様な表情で白紙同然の僅かな金額で入札して、競争心をあふり自分の配当金を多くする訳である。

本来の模合は複数の発起人の呼び掛けで発会し、発起人は「手元」としてそれぞれ自分の紹介した会員に関して最後まで責任を持つものである。

それに主婦の小口ユーレーグラーでさえ、給付を受けるには連帯保証人を立てて、借用証書を差し入れる決まりであった。（高額の場合は保証人2名）従って責任が分散されると共に給付後の保全が成される訳である。

それに、入札は給付額記入方式が通例であった。

この「ファイバー」はこれらの本則を無視した運営であった。即ち、一人の発起人によって開会するユーレーで、初回の方は入札無しで発起人が給付を受け以後無利子で掛金だけを納め続けるが、その代り運営の責任者として不納者が出た場合は一人で弁償する義務を負う約束である。ところが、不納者が続出すると手におえなくなり「崩れ模合」になる訳である。

この発起常習者を一般に「ユーレー ウクサー（起し屋）」と呼び、心ある人たちから特別の目で見られていた。

この様なユーレーは付き合いで不本意ながら加入する人もいたが、大半はユーレーに無知か、「チュクイミー キーヤー」等で、経済観念の無い人として本来のユーレーから外された人が多かったようである。

その為か自浄性を失って無茶な競争入札が行われ、給付額入札制の場合でさえ掛金総額と落札額の差額が大きくなり「割戻し」として配当するほどになった。そのうちに配当額入札制となり、割戻し額の多額競争にまで発展する。

当然大損をして不納者が続出し、発起人はその負担の資金を得る為にまた新しいユーレーを始め、と言うことになるのである。

その様な運営が長続きする筈は無い。多くの人に損害を与えた上、破産、夜逃げの運命を辿ることは当然と言える。

（3）ゴロゴロ模合

この模合は戦後流行ったユーレーで、戦前の「ファイバー ユーレー」と殆ど同じであるが、戦前の場合は一般的に常識に疎い人々の参加で数も少なく、次第に是正されて長くは続かなかった。

このゴロゴロの方は戦後数回の通貨切り替えて、一般有識者までも金銭感覚が変わり、それにアメリカ式のスラッグマシンの出現で一攫千金の風潮が加わったのも流行の原因だったと思われる。

それに戦後の模合の全てが「配当額」の競争入札制になって、更にその流行を加速させた、と考

えられる。

この「利益追及目的」の模合は配当金その日に手に入るのが大きな魅力になって時を経ずして広まり、その金額、発会の数など戦前のと比較にならない程の流行であった。従ってその被害額も人員も多くなり、社会問題にまでなった程である。

「配当の多いほど良い模合だ」と懸命に続けた人の言葉だけでこの模合の性格は説明する必要も無い。

傍で聞くと「仲間を損させるのは、良いユーレーだ」と聞こえるからである。

以上の3種とも「ユーレー」や「ムエー」の本質を考えれば誰でも気付く筈であるが、それが流行するところに人間の浅ましさを感じる。

儲かった人は「夢よもう一度」と続け、無茶な競争でウクイメー（送り模合）が払えなくなり金に詰まると、新しい模合に入って若取りしてまた大損、そしてまた…の連続でカード破産と同じ結果になるのは当然である。

なお、この沖縄版の3例には「ユーレー」の歴史も刻まれていて面白い。

まず、「トゥン シジチャー」には「ムエー」や「ユーレー」の語が付いて無い。このことは、助け合いを無視したこの様な組織は「ユーレー」等と全く関係の無い、現代語で言えば単なる悪質な「マネーゲーム」である、と言う事である。

戦時中のものは「ファイバー」と言うレッテルを貼って「偽物」であることが説明されている。なお、これで「ユーレー」と言うのが普通用語で「模合」と言う語は一般では使っていなかった事が分かる。

戦後の「ゴロゴロ」には、その馴染みの無い「模合」と言う語が登場して、ますます「ユーレー」の本質を不明瞭にした様に思えて仕方が無い。

また、これらの名付けにはその時代を風刺したユーモラスな語が用いられており、先輩たちのセンスの良さに感心する。

「ファイバー」の名付けもそうであるが「ゴロゴロ」の名は一種のドラマを物語っているようで実に見事である。

この「模合」が流行した頃は「ボウリング」の最盛期でもあったから、それになぞらえたと思われる。

即ち、「球」をゴロゴロ転がして、並んでいるピン（模合仲間）を蹴っ飛ばし、挙げ句の果ては自分（球）も奥の奈落に「ゴロン」、と言う構図を風刺したものではなかろうか。

（4）模合詐欺 違法金融

今年（平成7年）5月13日の沖縄タイムス紙に「模合金横領で逮捕の女性、架空の名義でだます、被害者60人以上か、余罪数億円の疑い」と6段抜きの見出しで報道されている。沖縄市での出来事である。

発起人は最初に落札して次回から姿も見せなかったとのことである。

そもそも、架空名義で模合を組織した、と言うことから異常である。「ユーレー」が一説では「寄り合い」とも解釈されているから「メンバーが顔を揃える」ことから始まるのが常識である。会ったことも無い人たちが金を出し合って信頼関係を結び、助け合いをする事が出来る筈は無いのである。

更に、7月12日の琉球新報紙によると、「2億円の模合、無許可開設、暴力団組長に懲役1年」とあり、判決の理由は「沖縄で広く行われている相互扶助や親睦を目的とした模合には当らず、銀行法違反である。また、相当額の損失を受けた人もいる」とのことである。この方は、石川市、沖縄市、北谷町と広範囲に渉る地域で行われ、その影響も大きく、掛金は2億6千万円を越す多額という。

銀行法違反とは、大蔵大臣の免許を得ないで模合（頼母子講）を開設した事のようにである。それに「模合崩れ」で詐欺事件に発展したり、民事訴訟になるケースはあるが、銀行法の適用は珍しいという。

ところで、この判決に対して被告人もその弁護人も「沖縄の伝統的な地域慣習である模合がこういう形で判断されるのは不当、どういう基準で模合を判断したのかあまいで、社会的な影響は大きい」として控訴する構え、とのことである。そして、模合の法的問題はいよいよ高裁で争われる見込みだ、との解説がなされている。

この2つの事例を知って唖然となったのは私だけではない、と思う。

まず、法律の文言は如何であれ、「結い」の心で行われる「ユーレー」が何故、この様になるのか、それでも「助け合い」と言えるか如何か、と言う事である。

そして被告側弁護人の「伝統的な地域慣習」と極め付けた主張が気になった。

果たしてこの様な「分配額」を競争する仕組みが、昔からの伝統であったか、それで「助け合い」が行われるだろうか、と気付いたからである。「ユイマール」とはとても言えないからである。

先だって、近くの食堂の女将さんにそれとなく聞いたら「模合は中間ほどで取るのが良い」との答えが返ってきた。「最後に取った方が儲かるのでは」と反問したら「半分過ぎたら崩れる危険が多い」との返事であった。

利得競争の激しさと、模合の実態に驚いた次第である。

ユーレーの変遷（1）

「結い」の心に反する悪質模合は、明治時代から数多く新聞報道されているから、昔から有ったということになる。

そしてその都度、社会問題として住民の大きな批判を受けてきた。

それでも貨幣経済の発展で誰でも現金が手に入ようになって、益々盛んになり、戦後間もなく流行した「ゴロゴロ模合」はこの「悪徳模合」の代名詞になったが、今ではそれさえも「沖縄の伝統的な地域慣習」として市民権を得る勢いである。

何故この様になったか、その原因は何だろうか、を考えて見たい。

1. 名称の変化

まずは従来「ユーレー」と称したこの組織が「模合」と言う名に変わったことが上げられる。それによって本来の「結いの心」が失われたのではなかろうか。

前に述べたようにこの文字からはその本質は理解出来ないからである。幸いに「模合は助け合いの金融である」と言う言葉だけは受け継がれている。

然らば、実際の運営がその言葉通りであるかである。言い替えれば「結いの心」で組織され、助け合いの手段として運営されているか、である。

そこで、現在の模合の仕組みと、戦前の庶民の間で行われていたユーレーのそれとを比較しながら検討して見ることにする。

2. 組織の変化

(1) 発起人(責任者)

戦前は「ムエー」は勿論、一般の「ユーレー」でも全て数人の発起人によって開設され、更に数人の陣容で強化された「手元」で運営されて最後まで共同の責任者を持つ仕組みであった。

このことは責任の分担にもなるが、発起の時点から「結いの心」即ち「共同」「共助」の理念が表れていた事を意味する。

それがこの悪質模合では、一人の発起人で運営されたと思われる。

明確な記述は無いが、明治、大正時代の新聞による「模合崩れ」の記事には「勢頭(シードゥ)」と称する発起人によって運営された模合は…。また、模合取締規則(大正6年)に「無資産の勢頭の取締り」などと記載されている。

「勢頭」は頭役(かしら・やく)のことで今で言うリーダーであるが、何れの記事にも複数表示がないから、戦前「ユーレー・ウクサー(起こし屋)」と呼ばれたこの種模合の開設を業とする人(単独)の事と解釈される。

一口に言えば現在のように一人の「座元」で発起、運営され、最後まで責任が持てずに「崩れ模合」が続出したであろう事は容易に理解される。

(2) 保証人制度

戦前は10銭程度の親睦ユーレーグラーでさえ給付を受けたら保証人付きの借用証を入れるのが常識であった。従って、崩れることは殆ど無かった。

しかし、保証人がそれを弁償するために自分の子供を身売りすると言う悲劇も有ったとの事である。(それ程義理、責任を重んずる時代であった)

現在の単独の座元発起では、例え保証人制度を作っても無茶な競争入札で、その保証人自体が大損すれば他人の分を弁償する力はない筈である。

その数や金額が大きくなると最終的な責任者である「座元」の独力では収拾出来ない事は明らかで「模合崩れ」になるのである。

（3）競争入札の方式

入札方式には数種あるが戦前一般の模合（ユーレー・ムエー）に用いられていた「受給額」記入式と、現在全ての模合に用いている「配当額」式との違いを述べて、本来の「ユーレー」の精神に対する適否を検討して見る。

（イ）受給額記入方式

競争入札の場合「私は幾ら欲しい」という金額を表示し、その最低金額が落札する方式である。そして、受給後は一定の利息（ウクイ リー〈送り利息〉）を負担するから、回が進む毎に掛金総額は増える事になる。従って給付の遅い人ほど受給額が多くなるから、未給付者にとっては、貯蓄になる訳である。それで、この方法を「積立て式模合」とも言う。

（ロ）配当額記入方式

「未給付者に幾らずつ配当します」という金額を入札し、その最高額が落札する方式である。従って利息は一括前払いになり、受給後も定額の掛金だけ納めればよい。一般に「割引模合（配当式）」とも言われる。

この両方式を計算面だけで比較すると、利息が後払いであるか、一括前払いであるかの違いであるから、理論的には同じである。

なお、本来「ムエー」には配当という制度は無い。総額と給付額の差は積立て金となるのである。この2つの入札方式を前に述べた「ユーレーの本質」の面から比較して見たい。先ず、「ユーレー」とは「助け合いの精神」を実践する金融組織である。そして実務的には不時の費用に備えての保険であり、また貯蓄でもある。

それで「受給額」方式は、言葉で表すと「00円貸して下さい」と言う「願い入れ」であり、相互扶助の心が前提となっている。

一方「配当式」には「00円配当してやる」と言う、高飛車な言動が感じられ、「結いの心」にそぐわない方式と言える。

また、未給付の人に、より多くの利益を与える事で勝負することになるから、入札最高額の限度を決めて置かないと無茶な競争となり、損得の差が著しくなり、崩れる危険が増大するのは当然と言える。

この場合の受けた配当金を貯めておけば貯蓄になるが、一般的には「ただ儲け」と言う観念になり直接消費に回るのが普通だと思う。

言葉を変えて言えば、前者の「貯蓄型」に対して、この配当式は「消費型」と言うことになり、庶民のユーレーの観念とも違うことになる。

なお、歴史的には「受給額方式（積立て式）」は鎌倉時代の無尽で関東で行われ、「配当式（割引式）」は関西で行われたとのことであるから、商人型入札方式とも言える。

本来の「ユーレー」は日常生活の一部と言えるほどに庶民には欠かせない組織であり、その役割や必要性は前に述べた通りでその方式も「結い」の心をもった堅実な運営であった。

然し乍ら、戦後「模合」と言う語が一般語になると共に、経済の発展と社会福祉の向上によって一般的な親睦だけが目的になり、従来の純粹の「ユーレー」には「親睦」と言う冠詞を付け、その運営方式までが今まで「悪徳模合」に用いていた「配当額入札」に一元化されて単に「模合」と言えば従来「ゴロゴロ模合」と呼ばれた模合を差す様になって、「善悪」の区別が不明確になった。正に「悪貨が良貨を駆逐」したのである。

ユーレーの変遷（2）

3. 変化の過程

この重大な変化が何時ごろ、どのような過程で起こったか、を私なりに検討してみた。

以下は私が少年の頃（昭和10年代）アチネーグラー（商売小）で那覇辻町にも出入りしていた母から聞いた話を基にした憶測である。

戦前の辻町は、美妓3千を擁する、と言われた華街で旧正月20日（ハチカソーグワチー）に催される「ジュリ ンマ（尾類馬）行列」は県内外から大勢の見物人が押し寄せる那覇3大まつりの1つとして有名であったが、昔からの女性自治の制度もあり、他の地域と異なった風俗があった。

母の話とは、その辻町にまつわる次の2つであるが、同時に纏めて聞いたか、別々の話であったかは記憶にない。しかし、今考えて見ると両方共「模合」と関連があるように思える。

話の1つは「辻（町）には、シン グワン（1000貫…20円）、シン グヒャックワン（1500貫…30円）ユーレーもある」との事であった。

当時一人前の男の日給が1円程度で、近所でのユーレーは2円が最高の時代であったから、中学生の私にはこの多額のユーレーは嘘に思えた程である。

もう1つは、「ムイメー」の話であった。

「ムイメー」とは今で言う「自治会役員」で、辻町を2つの地域に分けて、各々2人のムイメーとその補佐役である4人のムイメー・グワ（小）を置き、この華街での1年間の全ての行事を取り仕切る役名でいわゆる「年間行事实行委員」である。

これらの「ムイメー」は街中の大勢のアンマー（妓女の抱え親）の中から、既にそれを経験した長老会議で候補者を指名し、アンマーたちの総会の同意を得て選任されるので「アンマー冥利」に尽きる名誉職であったと言う。

この役目は遊廓の組合の伝達業務や街の守り神のウグワン グトゥ（御願行事）から、恒例の「ジュリ ンマ」をはじめ、その他の行事を伝統に従って実行する大役であった。従ってその運営

に多額の費用が掛かるが、それもこの「ムイメー」の負担だったとの事で、この大役に指名されるとその余りにも大きい経費負担に畏れをなして「未だ未熟であるから」等と遠慮し、又は他の理由で断っても許されなかったと言う。

母の話とは、その「ムイメー」に指名されたアンマーが「イリヒ（費用）」の事で頭を抱えていた、と言う内容であった。

この2つの話を思い出して次のように推理した。

まず「ムイメー」は漢字にすると「催い前」ではなかろうか、と考えた。

公共的な共同の行事を意味する「ムエー」の原語の「催（も）やい」にアタイメー（当い前〈係〉）の「前」を付けて、共同行事实行の係員（責任者）の意味だ、と解釈したのである。（文献では「盛り前」とある）

そこで次のように想像して見た。

「ムイメー」が先ず手掛けるのは資金作りであろう。そしてそれに打って付けの方法は、昔から行われている「ムエー」である。

「ムイメー」に当たったアンマーは馴染みの大商店のスーマー（主人）や金貸し業のタンメー達にも加入をお願いして、模合を起したであろう。

この様な豪華なメンバーであるから、掛金は2、30円の多額であっても不思議では無いことは容易に理解できる。或いはもっと多額のものもあったかも知れない。

発起人であるムイメーはその俣「手元」になり、場所も自分の部屋（ウラザ…裏座）となって「手元」イコール「座元」と言う形になった、と思う。

そして、初回の給付は手元の「ムイメー アンマー」が受けるのである。

給付を受けたアンマーは無利息で次回から掛金だけを払い、幾らかの酒肴を提供した、と思われる。或いは実費程度で接待したと思う。それを定額化したのが現在の「座料」ではなかろうか。

先に述べた模合の分類からすると、ムイメー アンマーにとっては「ムエー」と言える。しかし、次の回からは商売人たちが自分の営業資金としての競争入札になるから「ユーレー」である。（ここにも両語の混雑が見られる。）

さて、第2回目からの給付である。金銭運営に専門の商売人にとっては、従来の「受給額」の入札方法ではその後の利息加算、掛金総額の変動など計算上面倒である。それで、これを単純明快な利息一括前払いの「配当額」競争入札に合理化したと思われる。また、この方法では支払利息の帳簿記帳が1回で済むので事務上も簡便である。

この資金取得方法は経済界で広く利用されるようになり、資金繰りに敏感な商人の事であるから金額、口数とも多くなり競争も激しくなったと思われる。

高額の配当で落札して模合では欠損しても、季節商品の仕入金に間に合ってそれよりも多くの利益が有れば儲けである。商人にとっては、利息よりも入金の方が優先する場合は常識である。

従ってこの様な「模合」は資金繰りとして常道であって、悪質呼ばわれする謂われは全く無いの

である。

ところが、その場で現金の配当が得られると言う魅力は特に女性の欲望を誘い、街方（マチガタ…都市）の金持ちの奥さん方の間で行われたであろう。

それが上流社会の婦人たちの付き合いの場などへと広がり、一般社会でも行われるようになった、と考えられる。

そして利得競争が激しくなると、落伍者が出る様になった。しかし、従来数人の「手元」による責任分担が、この新方式での「座元」が一人で全責任を負う「単独手元」の組織ではその対応が出来ず、遂に模合崩れとなり社会問題になったのである。

元来「座元」とは「座料」と言う語が示すように「模合の座（個人の家）の主」の事である。この「座元」が「座長」と解釈されて「支配者」になったのではなかろうか。

もっとも、現在の模合は個人の家で催すことは滅多に無く、殆ど小料理店かレストラン等になっているから「座元」とは、場所を予約する等、模合の座の「世話人」の意味になった、とも考えられる。

最初に挙げた「配当額入札」（分配方式）への変革は「ユーレー」の運用に大きな変革が見られる。

即ち、「受給額」入札はやむを得ない事情で金が必要だから、との意志の表れであり、本来的には最後まで掛け続けて、なるべく多額の利息の加わった額を手に入れたい。即ち「貯蓄型」思想が主であった。

実際に戦前の土地や家屋の建設の殆どがこのユーレーによる貯蓄であった。ところが、現在の「配当金分配方式」は「消費型」になったのである。

利息は各回ごとに前取りしているから、最後に給付を受けても掛金の口数倍でしかないのは当然である。しかし、その間に受けた利息は全くの不労収入だ、との観念からそのまま直接消費に使われるのが普通だと思うからである。

今の世は数千万円のマンションも月賦で購入し、日々の生活も「カードローン」で営まれると言う。模合の給付金もその支払いに向けられるのではなかろうか。

「ユーレー」が「消費型」の庶民金融になったのも時勢の成せる業であり、嘆く必要は無いが、その様変わりには納得が行かないものが残る。

む す び

この記述の動機は、戦前の「講ムエー」や「アンマー ユーレーグラー」の素晴らしい機能ぶりを思い出し、その歴史を探ると共に現在との比較をして見たかったからである。率直に言えば、一種の懐古趣味に過ぎない。

先日、若い人に「模合とは」と、質問したところ「集まって酒を飲むこと」の答えが返ってきた。親睦を目的とする集いであるから、なるほど、と納得し悪徳模合の横行する中で良くぞ育った、と

安心したものである。

貧乏人同士の、狭い地域内での助け合いの手段に過ぎなかった「ユーレー」が「郷友会」「同期生会」などと遠地からも集まり、それを「親睦模合」と名付けて親交を深める風景は傍から見ても楽しそうで、その有意義さを感じる。しかし、その内に不可解な問題に突き当たった。

あの悪名高い「ゴロゴロ模合」を「沖縄の伝統的な習慣」として正当化する発言が飛び出したことである。それが告発された被告人側の弁明であったにしても、麗しい「結い」の心がこの様に解釈されると言うことは許しがたい問題である。

何故そうなったのか、考え込まざるを得ない事になった。

先ず気付いたことは、「ファイバー」とか「ゴロゴロ」の語を付けて本物のユーレーと区別した「偽物」が、堂々と「模合」と言う本家語になり、逆に本来の意義を継承した模合には「親睦」と言う冠詞を付ける様になったことである。

本来のユーレーの入札方式が簡便化されて、運営方法がこの悪質模合と同じ方式になり、形の上では区別が付かなくなったのもその一因であるが、基本的には「模合」と言う辞典にも無い字句で、然も不明瞭な説明のためにその真意が伝わらないのが素因では無かろうか。

戦後変わったものの1つに、ウチナーグチの普通語化がある。戦前の標準語の強制時代からすると、全く考えられない出来事である。

「イチャリバ チョーデー」「ヌチドゥ タカラ」それに「ユイ マール」である。これらの言葉はすっかり馴染んで新聞でも普通の会話でも標準語と全く同じ様に使われている。

そこで、現在「模合」と書き「もあい」と呼んでいるのを「ユーレー」と書き、呼んだら如何なものか。

「ユイ マール」の姉妹語として、その語だけでも本質が分かると思う。